

ことばを生きる体験 (二)

——意味の豊かさを求めて——

浜口 順子

〔ことばをしっくり理解する〕

以前オランダという小国に二年間滞在していた。帰国まであと数ヶ月となった頃、精神的にどこか不安定な状態が続ぎ、地に足がつかないような感じを自覚するようになった。しかしそれも、たまに日本人に会って何か話をする機会に恵まれると不思議に解消された。この変化を具体的な感覚で表現するならば、私の中にできていたすき間がみるみる埋まっていく感じだった。当時の私のオランダ語は日常会話ならば大体理解できるようになり、自分からも片言ながら意を通じさせることができる程度だった。オランダ人と話す場合、ききとれない時は言い直してもらうなどして理解していたのだが、意味はわかっていても理解していないような気分によくおそわれた。(片言の日本語を話せるオランダ人と話していても似た感覚は残った。)「言っていることはわかるが、本当

にそれを言おうとしているのか」と思ってしまうのだ。相手の顔の表情が話の内容と矛盾しているように思われたり、そもそも相手が私に対して肯定的な感情を抱いているのかどうかを読み取れなかったりすると、ことばそのものの意味が宙に浮き上がった。こうした「理解しきれない」感覚が日常化すると、私をとり囲んでいる世界がすぎ間だらけで、一つの意味ある全体として焦点のあった像を結ばないのだった。

日本という文化を共有している人々とはことばを交わすことで体験した「すぎ間が埋まる」感覚は、空白を満たすものとしての「反響」(ミンコフスキー)という聴覚的なメタファーを思い当たらせる。「……自己と環境はこの運動(注・反響)のなかで一体化し、一つの全体に融け合いながら、自己自身のうちに存在理由をもった閉じられた世界を形成している。」反響して相手とのすぎ間を充満するには、ことばに定着している記号的意味を理解するだけでは足りない。日本人の語ることばをしつくり理解している気分になれるのは、相手の語り口につ

随した、いわばその地となつてゐる状況全体を含めて、ことばをダイナミックな生きた記号として読めるからである。つまりことばそのものの意味の他に、それが語られてゐる個別状況(語る人の文化的背景や身体的表現など)が意味を語り出しているのであって、両者を複合的に理解してはじめて、人と人との関係が豊かに反響しあい「満ちる」ということができるのではないだろうか。この意味の重層性が「しつくり理解した」という充実感につながっているのである。

〔現実とイメージーションの間で〕

七歳のA男がテレビゲームのコントローラーに、どこかで拾ってきたらしい三角形の小さい木片をゼロハンテープで取り付けている。その光景を見た瞬間、私自身のある記憶がよみがえった。やはり小学校の低学年の頃だったと思う。近所の原っぱに一〇センチ四方ぐらいの厚ぼったい木切れが落ちていた。奥の方が少し斜め上がりになっていて、いかにも鉄人28号の正太郎少年が持って

いたコントローラーを直感させる形状だった。早速持って帰って、針金製のアンテナやギアを差し込んだり操作ボタンを書いたりした。私の空想の中ではもう巨大な鉄のロボットが眼前にぬっと立ち上がっていた。

A男は私の方を振り返って「これでパワーが大きくなるんだ」と、目を輝かして語る。私はその興奮がなんだかよくわかるような気がして「へえ、すごいね」と言った。その時だった。隣の台所で洗い物をしていた母親が少し苛立ちながら「バカみたいなことやめなさい。そんな変なものくっつけてもしようがないでしょ」と水をさす。A男はそれには何も答えないで、じきにコントローラーから離れて別の部屋へ立ち去った。どういう脈絡があつて母親がそう言わざるをえなかったのか真意はつかみかねたが、私にはやはりそのことばがむごいものに聞こえ、A男を直視するのがつらい程だった。しかし当のA男にとっては起こるべくして起こった事なりゆきであつたのかもしれない。

ごっこ遊びの中で語られることばに、子どもは二重の

意味づけをしている。ことばという公共の道具を用いて「これでパワーが大きくなるんだ」などと語りかけてくるのは、自分の個人的な状況を相手に知らしめようとする行為である。つまりその時の自分の世界の意味が彼独自のものであつて、相手には知られていないという予想が前提となつている。しかしこれを聞いた方が真に受けて、「パワーが出る」ということばの内容を現実一致させようとすれば、「バカらしい」と感じてしまうよりほかないのである。逆にそのことばの語られている状況を共有して、A男の世界で透かしてそれを聴くならば、A男が現実とイマジネーションとを混同しないままに二重の意味を重ね合わせていることが見てとれるであろう。子どもがことばに込める意味の重層性、多層性に、大人側も想像力を駆使して目を開く用意があつていいのではないだろうか。

〔ことばのかたちに執着する〕

B男は養護学校に来るとき、新聞から切り取った全国

の週間天気予報表をいつも手に持っていた。そこには太陽・雲・傘をそれぞれ形どった晴れ・くもり・雨のマークが、都市名と曜日で縦横に仕切られた表の中に並んでいた。B男は校内のどこに移動するにもその紙切れを持ち歩き、遊びのあい間にふと手を休めて、その表にじつと見入るのだった。そばにいる先生はその様子を見て、「札幌はあした晴れ時々くもりでしょう」などと表中の記号通りにことばにしてみることが多かった。B男自身も、テレビの天気予報官が語るような口振りを機械的な響きでひとりごちていることが見受けられた。

B男は人と直接コミュニケーションをもつためのことばを口にするとはなかったが、「○○チョコレートしんはつばい、おいしいよ」というようなテレビコマーションのキャッチフレーズを歯切れのよい口調で声に出すことをよくした。また、いろいろな銀行の名前を挙げて先生に書かせ、書き上がった紙を壁に貼らせて、満足気にながめていることもあった。雑誌やカタログのページを繰ってはふと手を止めて、ページの端の方にある商標

をしつと見入っているのもよく目にした。

天気予報のマーク、コマーションのコピー、銀行名（おそらく街頭のビルの壁面に立ち並ぶ「……銀行」という看板の印象が焼きついているのであろう）、商標などは、どれも私たちのまわりにある世界に発光して視覚に突きささってくる記号である。B男にとってこれらの記号がなぜ注目されるのか。付随して思い出されるのは、彼の儀式的ともいえる行動である。帰宅時間が迫ると、きまつてある教室の入口付近に上ばきを注意深くそろえて脱ぐのだった。彼の学校生活全体を見てもいくつかの遊び（行動）パターンを反復する傾向が強く、たとえば二つの台の間かけ渡したはしごの遊具がホールに出ていないと、執拗にそれを出せと身ぶりで先生に要求し、さもないと他の活動が始められないようだった。

B男の世界が記号やパターンなどの「形式」に支えられて安定を確立しているのだという考え方もあるだろう。しかしB男を見ていて、こうした諸形式が彼に心地よい安定を与えているようには見えなかった。むしろ形

式を介して何かを模索しているのではないかと思われる。私たちがコマージュの文句や商標に殊更とらわれないのは、その形式と内容を自然に調和させて受けとめられているからであろう。それに比べてB男の語る「アシタハニツチュウヨクハレマスガヤカンカラクモガオオクナルデショウ」という音声は、内容（記号的意味）から一時解放されて、形式そのものとして戯れられているように聞こえた。

人が記号とすることばを習得し使い慣らしていく過程で、ことばの意味（内容）の可塑性は貧困になり、多様性を失い、そのかわりに記号的機能をより正確に果たすようになる。つまりある記号が一定の意味にしか対応しなくなるのが、人間の築いてきた記号文化（ことば社会）の望ましい方向性なのである。さもないと情報は混乱し、たしかに意思疎通は困難になるだろう。しかし、大人には帽子にしか見えなかった絵が、星の王子様にとっては象を飲み込んだウワバミを意味していたように、記号の一元的意味以前にある多様な発生的意味が、人間

という非合理的な存在の深部でいつも脈打っていることを忘れてはならないのではないだろうか。

B男を見ていると、記号の外側（形式）と内側（意味）とを直結させている鎖を一時解き放して、B男自身の主体的な意味づけ（B男の身体性）を記号の内面に回復しようとしているようにも思われてくる。古来人間が「表現と内容の一体性の確立」を模索してきた姿を連想させもする。いわば「コトバのデジタル性」（丸山）を一時否定してことばを生きたことによって、自己表現を十全になしうる手段を獲得しようとしているかのようでもある。これはB男の主観的な世界の解釈というよりも、むしろB男の世界を媒介にして、人間一般のことばとの永遠に続く葛藤を透視しているのかもしれない。

〔同じことばを投げ返す〕

オランダのユトレヒト大学教育学研究所で、Hというダウン症の女の子（当時一〇歳）のプレイセラピーに参加したことがある。学校でまわりの子と仲良くなれな

いというのが両親の主訴であった。遊び相手の子どもにも「……しろ」というような命令的なことばしかかけられないので、遊びが長続きせず、相手に立ち去られてしまうという。実際にそうした場面は私自身も観察した。反面、愛着を感じた大人には度を越した甘え方を示し、両親との面談中、研究所の教授の顔をなめてくる程であっ



た。对人的な距離感、社会的関係が育っていないように見受けられた。プレイルームで週に一度約一時間、私と一緒に遊ぶようになったが、私のオランダ語会話能力の限界が考慮され、まずはHのかたわらに立つてなるべく行動を模倣していくようにと大学の相談チームから指示された。極端に不自然にならない程度にHの言動をま

ねすることになる。H：「名前は何？」私：「名前は何か？」これが数回繰り返されるところから始まった。H：「ここにあなたの名前を書きなさい」私：「あなたも書いてね」——何を言ってもこだまのように同じことばが返ってくる状況はHに奇妙な印象を抱かせたと思う。

セラピーの経過をここで詳述してられないが、六回目の日にひとつの画期的な変化が起こった。H：「はさみはどこ？」私：「はさみはどこかな」H：「じゃあ一緒に探しに行こう」——命令的なことばによって上下関係を押しつけてきていたHが、私と同じ目の高さまで下りてきてくれたような気がした。この劇的ともいえる変化の序章として、名前を書く遊びに見られたエピソードを紹介しておきたい。Hは毎回ホワイトボードに私たち二人の名前(HANNEKE、JUNKO)を書いていて、四回目のセラピーの時、一文字一文字をゆっくりと私の名前をつづった末、なぜか「M」の文字を付け加えた。「JUNKOM」——オランダ語の動詞「来る」kommenの命令形komが私の名前の末尾に重なって、

「ジュンコ、来て」(Junko, kom!)と私に呼びかけているかのようにだった。その次の回(第五回)には「JUNNEKE」という二人の名前の融合形をHが(おそらく自分では気づかないうちに)書いた。「来て」と私を呼び招き、さらには名前を融合させることで、命令的な言語関係では近づきえない二人の間の距離を狭めていき、「一緒に」何かをできるといふ全く新しい関係をH自身が見つけ出したといえるだろう。

命令的なことばを投げかけられて、それに服従したり反抗したり「そんなクチをきいてはいけません」とたしなめたりしても、命令的な言語が作り出す人間関係の性質を一新するのには功を奏さなかったであろう。なりゆきはどうなるかわからなくても、命令をそのまま同じことばで投げ返してみる。するとその場の状況はまずは奇妙な色彩を帯びて、一方の人が「命令」で作り上げようとしていた関係性の基盤が危うくなる。そして関係の意味が生じる発祥地へと二人を引き戻す。そもそも命令として語られたことばの意味が解体する現象が、同じこと

ばの投げ返しによって生じているのである。

心理療法の技法を例に出すまでもなく、日常生活の中でも返答に窮すると同じことばを投げ返すことはめずらしくない。「どうしたらいいのかしら」と相談を持ちかけられて、「どうしたらいいのかしらねえ」とことばを繰り返すだけでも、案外、相手は心なぐさめられるものであろう。投げかけられたことばの意味を真向から受けとめて、「私はこう思う」とか「うまく答えられない」などと返答するばかりが、人と人との関係を育てるものではない。ことばの意味をひとまず二人の間に漂わせて、その中で二人が振動しあう。そして状況の意味が位相変換するのを待つ。こんなことばとの関わり方もあると思う。

有能な情報（意味）伝達機能を發揮していることばの周辺に、あいまいに、多様に、状況に即応してことばを生きる人とことばとの関係があることをいくつかの側面から見てきた。文化としてのことばはもとより大人の独

占物ではない。子どもがことばをわがものとしていく過程で、ことばを生きて、ことばに込められ得る多様で重厚な意味を体験すること——これが意味豊かな人と人のつながりにも通ずるのだと思う。

△文献▽

E・ミンコフスキー著、中村雄二郎・松本小四郎訳「精神のコスモロジーへ」人文書院、一九八三

丸山圭三郎「コトバの身体性と二つのゲシュタルト」『思想』第六九八号（一九八二、八月号）岩波書店

（お茶の水女子大学）